

定光寺にある藩祖「徳川義直」の廟

名古屋の歴史を感じる「文化の道」を歩いた時に、尾張徳川家の菩提寺である建中寺を訪れたことがある。細かに観たわけではないが立派なお寺さんだった覚えがある、ところが先日、一度くらいは紅葉でも眺めてみようかと調べていたら、定光寺に尾張徳川家藩祖の徳川義直の廟があることを知った。定光寺の紅葉はさほどでもないという記憶があるが、これまで行ったことのない瀬戸の岩屋堂へも足を延ばし、ぜひ観てこようと11月26日おにぎりとお茶を持参して久しぶりに妻と出かけた。

1 東海環状自動車道「せと品野 IC」から定光寺へ

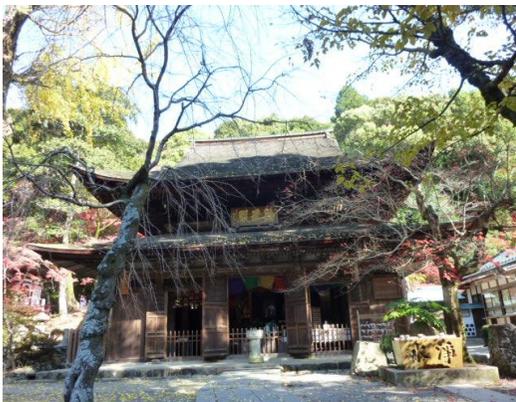
9.00 少し前に家を出て東浦 IC から高速道を走る、久しぶりに車で遠出するので直に腰が痛くなりだした。それに高速道の運転は単調で且つ高架を走っていると景色も見られず精神的に落ち着かない。途中鞍ヶ池 PA で小休止をした、少し休憩すると気分が晴れやかになる。

ここを出るとき参考にするためナビに定光寺を設定しようとした、がうまく設定できない「じょうこうじ」とインプットしても「勝行寺」ばかり画面にでてくるのだ。めんどくさいのでやめてしまった、じの点々がインプットされていないようだ。事前に調べてきた地図のほうが頼りになる、こんなことなのでナビは宝の持ち腐れになっている。

せと品野 IC を出ると一般道を直進する、そしてほどなくで国道 248 に合流するつもりで走った。でも丘をどんどん登っていくが国道に合流する雰囲気ではない。そのうちに名古屋学院大学のキャンパスが現れた、どうやらどこかで左折するところをまっすぐに走っているようだった。しばらく走ると道が T 字形に左右に分かれていた、左に少し走ると国道にぶつかった。ここを右折したが上半田川の交差点だった、はっと思ったのは 248 から左折するのは下半田川の交差点なので左かな？ いやな予感がした。でも少し走ると地図に載っている「しなのが丘病院」の看板があり一安心。そこから直に上半田川の交差点に出たので、左折して県道 205 を走って定光寺に 10.30 到着した。

2 紅葉のなか静かにたたずむ「無為殿(本堂)」

建武3年(1336)臨濟宗建長寺派の寺院として創建、慶安2年(1649)妙心寺派寺院として再興した。山号は応夢山、本尊は延命地藏菩薩で寺の案内書には次のように記されている……覚源禅師は諸国を遊歴し人跡未踏のこの地をみて、日ごろ信仰する延命地藏菩薩を本尊とし教化に専念。一夜衆僧等が定光仏の像を掘り出した夢をみて、寺を定光寺と名付け山号を応夢山とした……。室町時代の様式を残す本堂の前には、少なくなった紅の葉をつけたもみじが一本たたずみすばらしい絵になっている。そして、鐘楼の脇には真っ赤に染まるもみじが一本、これも存在感を示していた。訪れる人たちはなか



無為殿(本堂)と鐘楼横の紅葉

には若いカップルもいたが、ほとんど年配の方ばかりだ。もちろん今日はお休みではないのだから、当然と言えば当然だが……。もみじがたくさんあるわけではないが、そこここに紅葉が見られる……といった感じだが、ゆく秋を惜しみ、皆それぞれに紅のひと時を楽しむため、自然の織り成す景色に多くの人が見とれていた。



3 「源敬公廟」とは徳川義直の墓

本堂横に国指定重要文化財「源敬公廟(げんけいこうびょう)」の看板がある、はて何かと見てみる。やっと分かった、これが徳川義直の墓だった、でも何故源敬公というのか説明はなく分からなかった。帰ってさっそく調べてみた……この「源敬公」とは義直の「しごう(諡号)」、「おくりな(諡)」

と言って、生前の行いをたたえ死後に送る名前とあった。でもそこには「敬公」とあり源はついていなかったが、他の資料には「源敬公」とあった。そ

して、尾張徳川家の藩主にはすべて「おくりな(諡)」があることも分かった。この名前については徳川の正式姓は源であり、武士には源、平、藤原、橘の4つしかなかった。源でないと征夷大將軍になれなかったが、秀吉だけは第五番目の姓をもらって豊臣と名乗った。諡について言うと、天皇名もそうであり昭和天皇は昭和が諡で、裕仁が生前の名前である。

でも尾張徳川家の菩提寺は名古屋の建中寺のはずであり、初代藩主の墓がなぜここにあるのだろうか。しかし、資料によっては定光寺も尾張徳川家の菩提寺とあった.....本堂の裏手に入口があり、ここだけは100円の拝観料が必要。無人の受け付けに100円を入れて紅葉が覆いかぶさる石畳に行く。説明では徳川義直は慶安3年(1650)江戸で没し、墳墓・霊廟は遺命により定光寺東北の山上に慶安4年に造営された。この廟は明人のチンゲンピンが設計したと伝えられており、建物の構成は儒教に基づく祠堂になっているのが大きな特徴である。でも何故明人が設計したのか? これも分からない.....

国指定重要文化財の「源敬公廟」

現れた門はこれまで見慣れたお寺の門とは趣が違う、廟域は瓦葺土塀を巡らせ正面中央に正門である「竜の門」がある。まさに中国の雰囲気で、尾張徳川家藩祖の廟というにはしっくりこない。門からまっすぐ伸びた石敷きの参道正面に、庇のない四角い形の焼香殿がある。この焼香殿は神社の拝殿に相当する建物で、一重、寄棟造り、銅瓦葺になっている。内部は一室の建物で石積み基壇の上に建ち、石造りの階段を設けている。正面、背面の戸に施す雲竜の浮き彫り彫刻はとても精緻なものだ。どの部分かは不明だが左甚五郎の名作の彫刻もあると記されている。そして特徴は、屋根の棟に中国風に魚の形の棟飾りをのせていることだ。この焼香殿の右隣に同じ形で少し小さな宝蔵(祭器庫)が並んでいる。そして、焼香殿の背後一段高い所に、前面石柵の中央に「唐門」を開き、石標を立てた円形の墳墓が配置されている。宝塔形式を基本とする徳川將軍家の墓所とは対照的に簡素な構成である。

これらの物はすべて国の重要文化財に指定されている。

このようにお殿様のお墓にお参りするには、一段低く且つ下がった所から手を合わせるようになっているのだ。

4 尾張徳川家と藩主たち

①成り立ち

尾張徳川家は、徳川家康の九男義直を祖とする。さらにさかのぼれば、家康の四男忠吉が関ヶ原の戦い後に尾張清州城に封じられたのが起源。忠吉は慶長 12 年(1607)子供がいないまま没したため、甲斐国府中から義直が転封された。慶長 15 年(1610)には、本拠を清州城から名古屋城に移し、実際に義直が尾張に入国したのは元和 2 年(1616)のことである。御三家の筆頭でありながら 16 代続いたが、最後まで尾張徳川家から将軍を出すことはなかった。7 代藩主宗春の政策は将軍家の方針(質素儉約)に逆らい華美を極め、江戸と敵対した。反面この政策が名古屋の経済を発展させたとも言われている。8 代将軍選出に際しては紀伊徳川家に敗れ、吉宗が将軍となったことはよく知られている。石高は 61 万 9,500 石で尾張に 47 万余、美濃に 12 万余、三河と近江に 5,000 石、摂津に 232 石であった。



竜の門



焼香殿と宝蔵



唐門と墳墓

②分家

☆高須松平家 3 万石.....美濃国石津郡高須に本拠をおく。尾張藩 14 代慶勝と 15 代茂徳は当家から出て本家を継いでいる。

☆大久保松平家 3 万石.....陸奥国伊達郡梁川、享保 15 年(1730)断絶。

☆川田久保松平家 1 万石.....川田窪に屋敷を構えた、元文 4 年(1739)断絶。

③歴代の藩主

	藩主	生没年	藩主在任	諡(おくりな)
初代	義直(よしなお)	1600～1650	1607～1650	敬公
二代	光友(みつとも)	1625～1700	1650～1693	正公
三代	綱誠(つなのぶ)	1652～1699	1693～1699	誠公
四代	吉通(よしみち)	1689～1713	1699～1713	立公
五代	五郎太	1711～1713	1713～1713	-----
六代	継友(つぐとも)	1692～1730	1713～1730	曜公
七代	宗春(むねはる)	1696～1764	1730～1739	逞公
八代	宗勝(むねかつ)	1705～1761	1739～1761	戴公
九代	宗睦(むねちか)	1733～1799	1761～1799	明公
十代	斉朝(なりとも)	1793～1850	1800～1827	順公
十一代	斉温(なりはる)	1819～1839	1827～1839	僖公
十二代	斉荘(なりたか)	1810～1845	1839～1845	?
十三代	慶次(よしつぐ)	1836～1849	1845～1849	欽公
十四代	慶勝(よしかつ)	1824～1883	1849～1858	-----
十五代	茂徳(もちなが)	1831～1884	1858～1863
十六代	義宜(よしのり)	1858～1875	1863～1868	靖公

☆ 14 代慶勝は 17 代として再登場している

④菩提寺「建中寺」

慶安 4 年(1651)に第二代尾張藩主徳川光友が、父である初代藩主徳川義直の菩提を弔うために建立した。創建当時は周囲を石垣と堀で囲まれ、48,000 坪の境内に多数の堂が立ち並ぶ規模を誇った。天明 5 年(1785)の大火災で多



数の建物が焼失、1787年に再建されたが現在の規模は、第二次大戦後の区画整理などにより創建当時よりも小さくなっている。正式名は徳興山 崇仁院 建中寺といい、本尊は阿弥陀如来、浄土宗のお寺さん。

ここに眠る藩主は元禄 13 年(1700)に第三代藩主徳川綱誠の廟が建立され、翌年に第二代徳川光友の廟が建立され、嘉永 3 年(1850)第十代徳川斉朝の廟が建立されるまで 13 代の藩主の廟が建立されている。でも 14 代～16 代は明治になってから死去しているため、ここにはないようだ。そして明治期から廟や門など建物の中には名古屋市内へ移され、一部の霊廟は明治 8 年(1875)現在の小牧市に移築された。現在は歴代藩主の墓も光友のものを除いて平和公園に移されている。

かつての寺域は東区役所、東海高校、あずま中学校、筒井小学校などとなっている。また、三門前にある建中寺公園は、かつて 7 つの塔頭があった場所。

5 最も知られる七代藩主徳川宗春とは

尾張徳川家といえはまず「宗春」の名があげられる、彼は元禄 9 年(1696)徳川綱誠の 19 男として名古屋城で生まれる。8 代将軍紀州徳川家の徳川吉宗から梁川藩 3 万石を与えられる。享保 15 年兄の継友が死去したため、梁川の領地を返上し尾張徳川家を相続する。翌享保 16 年(1731)名古屋城へ入るとともに宗春と改名した。宗春は藩主に就任すると、自身の著書「温知政要」を藩士に配布、その中で「行きすぎた儉約はかえって庶民を苦しめる結果になる」「規制を増やしても違反者を増やすのみ」などの主張を掲げ、名古屋城下に芝居小屋や遊郭を誘致するなど解放政策をとった。これらの政策には御三家筆頭でありながら、兄継友が将軍位を紀州家の吉宗に奪われたことや、質素儉約を基本とする吉宗の享保の改革による緊縮政策が経済の停滞を生んでいたことへの反発があると言われている。吉宗の儉約経済政策に自由経済政策理論を持って立ち向かったのは、江戸時代の藩主では宗春だけである。

この結果儉約令で停滞していた名古屋の街は活気を取り戻し、その繁栄ぶりは「名古屋の繁華に京(興)がさめた」とまで言われた。また宗春は、尾張藩では一人の処刑者も出さないという斬新な政策も打ち出している。

しかし、浪費によって経済の活性化を図るものの、藩の財政も赤字に転じて行くことになる。これを観た国元の藩重臣は宗春失脚を画策する……………そ

して、ついに元分4年(1739)1月12日、宗春は吉宗から隠居謹慎を命じられ名古屋城三の丸に幽閉される。宗春の処分は死後も続き、墓石に金網がかけられ、12代藩主斉荘が就任する際に名誉回復するまで続き、天保10年(1839)金網が撤去された。遺体は建中寺に埋葬された、後に名古屋市の復興都市計画に伴い市内の墓が平和公園に移転、宗春の墓も移されるとともに、遺骸は火葬にされた。

6 緒川に7泊した徳川宗睦とは

幼名は熊五郎、徳川宗勝の二男として生まれた。父同様に才能に優れ、山村良由や樋口好古らを登用して藩政改革に乗り出した。新田開発や殖産興業政策、治水工事(熱田での開墾)の多くで成功を収めている。問題化していた役人の不正を防止するため、代官制度の整備も行っている。農村の支配強化も行い、徴税の確実性に務めている、藩士に対しては相続制度を確実なものとした。文化的にも基礎が築かれていた藩校・明倫堂(現在の明和高校)を創設して藩の教育普及に努めた。

ところがこのような改革を行いつつ結果、宗睦の晩年には財政赤字が見え始める。これを解決するために藩札を発行するも、これがかえって物価騰貴など経済の大混乱を助長してしまった。寛政11年12月20日、67歳で死去。宗睦の実子はいずれも早死にし、支藩の美濃高須藩から治行を養子に迎えるが、これも早死にした。そのためついに一橋家から斉朝を養嗣子として迎えて後を継がせた。このため徳川義直以来の尾張藩の家系は断絶した。

宗睦は尾張藩の「中興の祖」と言われている、確かに藩政においては前半と中盤では大いに成功をおさめ、藩政を発展安定化に導いた。しかし、晩年の財政政策の失敗はその後の尾張藩における財政破たんの一因をなしたと言われている。

7 緒川を訪れた江戸時代の尾張藩主たち

ふるさとガイド協会の研修会において、緒川の歴史を勉強し尾張藩主たちが緒川を訪れたことを学んだ。藩主たちは着任すると、まず知多半島巡行をしたという。領内視察と言うことだが、殿様が移動するとなると大変なことだ

った。風呂やトイレも殿様専用の物を持ち歩いたという、したがって行列も数百人規模だったらしい。当時緒川村にはまともな街道もないのに「本陣」があり、「沢田仁右衛門」が務めていた。彼は永井直勝の従兄弟。他には緒川村の指導者として竹内文左衛門(主に庄屋、元水野家家老)、塚本源左衛門(府外第二の金持ちで、千石船で酒を江戸へ運び 18 世紀後半に一番栄えた)がいた。しかし、1800 年頃竹内文左衛門家と沢田家は潰れてしまう。以後は日高理兵衛、竹内孫右衛門(文左衛門家の分家)が支配するようになる。そして塚本源左衛門は明治維新に名古屋へ引っ越している。

尾張藩主は 16 代まで続くが 4 人は幕末の人で、12 人の内 8 人が緒川を訪れている。初代義直、二代光友、三代綱誠、四代吉通、七代宗春、八代宗勝、九代宗睦、十二代斉荘である。藩主の知多巡行は緒川まで舟で来たという。名古屋城-----熱田-----大野-----柿並(野間)-----師崎-----緒川-----名古屋 のコースをとり二代光友は横須賀御殿で潮湯治をしたという。8 人の藩主のうち次の 3 人はこんなことが.....

☆宗春---4 回も来た、高根山から名古屋城を見て「望城の丘」と名付けた

☆宗睦---1775 年に来て、7 日間も泊られた

☆斉荘---1839 年に来たが、本陣はなくなり善導寺に泊る

尾張徳川家に想いをはせた見学を終え、正伝池を中心に広がる定光寺公園を眺めながら岩屋堂へ向かった。ところが公園の雰囲気がとても良くて、少し走った所にも小公園と駐車場が隣り合わせて並ぶ区画が複数あった。こんな場所は岩屋堂へ行ってもなかりと思ひ、急きょ予定を変えて駐車場に車を止めた。ベンチや水飲み場もある小公園のベンチに腰をおろし、太陽が燦々と降り注ぐもとでお弁当にした。私たちのほかに一組みの夫婦がやはりお弁当を広げた、久しぶりに野外で食べるおにぎりはことのほか旨かったことはいままでもない。一息入れてから岩屋堂へ向かった。